

**京都大学教育研究振興財団助成事業  
成 果 報 告 書**

平成22年3月31日

財団法人京都大学教育研究振興財団  
会 長 辻 井 昭 雄 様

所属部局 文学研究科

職 名 准教授

氏 名 家 入 葉 子

事業区分	平成21年度・学術研究書刊行助成		
刊行書名	Verbs of Implicit Negation and their Complements in the History of English		
著者(編著者)名	Yoko Iyeiri		
発行者名	John Benjamins / Yushodo Press		
発行年月日	平成 22年 3月 11日		
成果の概要	タイトルは「成果の概要/報告者名」として、A4版2000字程度・和文で作成し、添付して下さい。「成果の概要」以外に添付する資料 無 有(刊行書1冊)		
会計報告	直接出版費 (内訳は下記のとおり)	1,716,330円	
	収入見込額 (著者負担・売上見込)	516,330円	
	当財団からの助成額	1,200,000円	
	直接出版費の内訳		
	費 目	金 額 (円)	備 考
	組版代	1,230,000	
	製版代	46,000	
	刷版代	50,600	
	印刷代	77,000	
	用紙代	60,000	
製本代	171,000		
消費税	81,730		
合 計	1,716,330		

## 成果の概要（学術研究書刊行助成） / 家入葉子

学術研究書刊行助成を受け、平成 22 年 3 月 11 日に *Verbs of Implicit Negation and their Complements in the History of English* を刊行した。ここに助成への謝意を表すとともに、著書の概要を述べる。

本書は、さまざまな動詞の中から否定的な意味合いをもつ 11 の動詞 (forbid, refuse, forbear, avoid, prohibit, prevent, hinder, refrain, fear, doubt, deny) を取り上げ、その構文が歴史的にどのように変化してきたかを探ることにより、現代英語における動詞の構文選択のメカニズムを明らかにするものである。英語の動詞は、そのあとに that 節、不定詞、動名詞などのさまざまな構文を伴うことで、複雑な意味表現が可能となる。たとえば like は動名詞と不定詞を伴うことができるが、動名詞を伴うとやや一般的な事象に言及することになるのに対して、to 不定詞を伴うと具体的に「そうしたい」という含意が感じられることなどが、先行研究において指摘されてきた。しかしながら、現代英語を見ると、forbid は to 不定詞を伴うのに、類似の意味を有する prohibit, prevent は動名詞を伴うなど解明されていない点も少なくない。本書は、具体的な動詞を取り上げ、その発達についての詳細な分析を行うことで、動詞に続く that 節、不定詞、動名詞構文の歴史全般への理解を深め、さらに現代英語の解明にも寄与することを意図したものである。

研究にあたって使用した主要な言語資料は、*The Oxford English Dictionary* の CD-ROM である。辞書データのコーパスとしての利用は、近年、新しい研究の手法として確立してきているものであり、*The Oxford English Dictionary* は、英語における通史的な言語変化を探る上での重要な資料として注目されている。本書は、扱う動詞とその構文の分析を通じて、*The Oxford English Dictionary* のコーパスとしての利用の意義にも言及している。

全体は 6 章から成り、第 1 章では、動詞の構文の歴史的発達を概観し、G. Rhodenburg が提唱する Great Complement Shift (英語の動詞では、近年動名詞を取るものが増加しているという現象) を再検討する。第 2 章では、歴史的にも現代英語においても不定詞構文が際立っている動詞、forbid と refuse の発達過程を辿る。refuse の不定詞構文が歴史的に比較的安定しているのに対して、forbid は that 節を従えていたものが、急速に不定詞にシフトする。このメカニズムを明らかにする。第 3 章では、歴史的に見て動名詞の発達が際立っている動詞、forbear, avoid を分析・議論している。これらの動詞についても古い時代においては that 節の使用が一般的であるが、現在では動名詞が一般的である。興味深いことは、動名詞への移行に際して、不定詞構文を経由していることである。初期近代英語期 (1500 年—1700 年) に、that 節の衰退が不定詞構文の増加を招き、ここから徐々に動名詞を発達させる様子が、データの分析を通して明らかになる。第 4 章では、同じく動名詞構文が際立っているものの、単純な動名詞ではなく、from-ing のように前置詞を伴うものを取り上げた。具体的には prohibit, prevent, hinder, refrain である。これらの動詞の歴史を見ると、that 節、to 不定詞、前置詞なしの動名詞、前置詞付きの動名詞のすべての構文が段階的に起こっていることがわかる。現在でも前置詞を使用するかどうかで揺れている場合も多いが、この揺れには、これらの動詞が辿ってきた歴史が関係しているものと考えられる。本章では、この点を浮き彫りにしている。第 5 章で取り上げたのは、fear, doubt, deny の 3 つの動詞である。これらの動詞も古くは that 節を従えたが、that 節の衰退に際して、

第2～4章で扱った動詞とは異なる発達を経験する。具体的には、I fear, I doubtのような表現の頻度が高まり、文全体を修飾する副詞のような働きをするようになる。このような現象は、従来は談話標識という別領域で議論されてきたが、動詞構文の歴史的な枠組みで論じることが可能であることを本章は明らかにする。最後に、第6章が結論となっている。

本書の目次構成は、以下のようになっている。

Preface and acknowledgements

Abbreviations

List of tables and figures

Chapter 1. Introduction

Chapter 2. Verbs of implicit negation and to-infinitives

Chapter 3. Verbs of implicit negation and gerunds

Chapter 4. Verbs of implicit negation and gerunds with prepositions

Chapter 5. Verbs of implicit negation and subordinate clauses

Chapter 6. Summary and conclusions

Appendix

References

Index